

第5回日墨学長会議

日本とメキシコの大学長が集い、友好の絆を確認

10月6、7日、第5回日墨学長会議が四谷キャンパスを主会場として開催され、日本側から24大学・機関の約60人、メキシコ側から18大学・機関の約40人が集結した。同会議は日本とメキシコの大学長が集い、友好の絆を確認し新たな連携や協働の発展を目的として、2011年より2年に1度、両国の大学が交代で開催されている。

ホストする形式で行われている。本学からは睦道佳明学長のほか、司会に森下哲朗グローバル推進担当副学長および谷洋之イベロアメリカ研究所長、パネリストに幡谷則子外国語学部長が参加。本学の取り組み状況の紹介を交えつつ、参加大学と意見交換を行った。

6日の夜には、駐日メキシコ大使館の協力のもと同大使館でレセプションが行われ、参加者同士が親睦を深めた。7日は日本の伝統文化、武道を紹介。体育会空手道部が瓦割りなど演武パフォーマンスを披露し、会場を盛り上げた。

閉会式では、睦道学長より2日間に及んだ会議の成果の確認や総括の共同声明が読み上げられ、満場一致の拍手で承認、採択した。そして、睦道学長が「産学官のあらゆる分野において、緊密な協力関係の構築を誓い合ったことは大きな成果でした」と締めくくり、盛会のうちに幕を閉じた。



両国から延べ100人が参加した



メキシコ大使館で行われたレセプション

国連Weeks（1面から続く）

私たちの「食」を考える

世界の「食」を考える

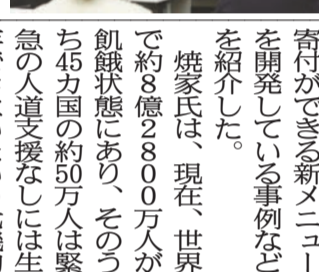
10月20日、学生総務担当副学長の永井敦子フランス文学科教授の司会のもと、「私たちの目の前にない人々の『食』にも関心を持つ」というテーマでシンポジウムが開催された。講演者に国連WFP日本事務所代表の焼家直絵氏を迎え、本学で食料問題に取り組む課

外活動団体FFI（Table For Two）Sophiaの学生メンバー3人を交えたパネルセッションも行われた。

永井教授からのテーマ解説に続き、FFI Sophiaの学生メンバーである南原麻里さん（法国3）、藤井美友さん（外仏2）、池田奈々美さん（総社1）が、活動内容を発表。食の不均衡に取り組むことを目的とし主にアフリカ地域への支援活動を行う同団体が、学生食堂との共同事業として、食券の購入によって途上国への寄付ができる新メニューを開発している事例などを紹介した。

焼家氏は、現在、世界で約8億2800万人が飢餓状態にあり、そのうち45カ国の約50万人は緊急の人道支援なしには生存できないという危機的現状とその背景について

学生メンバーもパネルセッションに登壇



学生メンバーもパネルセッションに登壇

報告。国連WFPの人道と開発の支援に関する取り組みや、自身の経験を参加者に共有した。

後半は、永井教授、焼家氏、学生メンバーによるパネルセッションを実施。学生から焼家氏に「国連WFPが他の国連組織とどのように連携を図っているか」「先進国で暮らす私たちが今できる支援活動は」といった質問が投げかけられた。焼家氏からは「学生ならではの発想で食料問題に取り組む姿を評価する。将来の国際機関で働くなど即戦力になってくれることを期待したい」という激励の言葉が伝えられた。

■ウクライナ戦争をどう終わらせるか？

10月22日、ロシアによるウクライナへの侵攻で始まった「ウクライナ戦争」をどう終わらせるかをテーマに、国際社会、

近隣国、および国連の役割について議論するシンポジウムが開催された。グローバル教育センターの東大教授が企画し司会を務め、駐モルドバ日本特命全権大使の片山芳宏氏、ジョージタウン大学教授で国連システム学術評議会会長のリセ・ハワード氏、京都芸術大学特別教授で元国連東ティモール特別代表の長谷川祐弘氏が登壇した。

1人目の片山大使はモルドバから参加。「ロシアの侵攻以降、多数のウクライナ避難民がモルドバに流入した。豊かな国ではないモルドバだが即時に大勢の避難民を受け入れ、政府と国民が団結して支援している」と現状を伝えつつ、日本社会が行っているモルドバでのウクライナ難民支援の内容を共有し、援助の継続を訴えた。



専門家が世界各地から登壇した

続いてハワード教授がワシントンから登壇し、ロシアの国際法違反、最近の過激化、核およびその他のリスクなどを順に解説した。そして、ロシアの戦争責任を問うことも含め、戦争を「私たち」がどう終わらせるかを考えるべきだと話した。

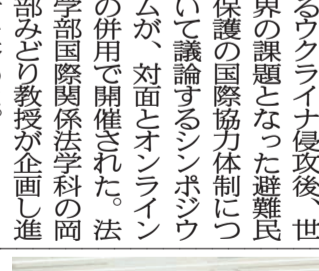
これを受け東教授は今後の5つのシナリオに続けて、どのような条件で対ロシア制裁を解除するかを考えると、「主権尊重」という国際秩序の基

本ルールを守る国」対「守らない国」という図式に持ち込み、まずはロシア軍がウクライナから撤退することを国際社会全体の目標にすべきと訴えた。最後に長谷川教授が「国連が平和維持部隊を派遣する」「国連平和維持部隊はNATO以外のアジアとアフリカ諸国からの軍隊で構成する」などの提案を行った。

■ウクライナ避難民保護にみる国際協力の将来

10月26日、ロシアによるウクライナ侵攻後、世界の課題となった避難民保護の国際協力体制について議論するシンポジウムが、対面とオンラインの併用で開催された。法学部国際関係法学科の岡部みどり教授が企画し進行を務めた。

睦道佳明学長のビデオメッセージに続いて、サザンメソジスト大学教授のジェームズ・F・ホリフィールド氏による基調講演が行われた。ホリフィールド教授は、「歴史的な視点とグローバルな背景」「強制移住の課題」「ウクライナー歴史的名誉教授の滝澤三郎氏、旧JICA研究所（現JICA）緒方貞子平和開発研究所」元研究員で東洋学専任講師の川口智恵氏、およびUNHCRジュネーブ本部対外関係部門ドナー関係シニア・オフィサーの帯刀豊氏によるパネルセッションが行われた。岡部教授から事前に提示された3つの質問「ウクライナ難民危機を受け、難民保護への国際協力のあり方に変化があったか」「変わったとしたらどのように変わったのか」「難民支援のための国際協力は本来どうあるべきか（それに向けた課題は何か）」を踏まえ、活発な議論が交わされた。



基調講演に耳を傾ける本学学生たち

■その他の企画

10月11日に「経済制裁のインパクト」EUと国連」、17日に「UNDP・UVキャリア・セミナー」、18日には「国際機関・国際協力キャリア・ワークショップ」を実施。いずれも本学公式ウェブサイトに記事を掲載している。

はケースバイケースで行われるとし、「合法的かつ秩序ある移動」の問題に取り組みなければならぬと指摘した。



基調講演に耳を傾ける本学学生たち

基調講演に続いて、元UNHCR駐日代表、元国連UNHCR協会理事長で東洋英和女学院大学名誉教授の滝澤三郎氏、旧JICA研究所（現JICA）緒方貞子平和開発研究所」元研究員で東洋学専任講師の川口智恵氏、およびUNHCRジュネーブ本部対外関係部門ドナー関係シニア・オフィサーの帯刀豊氏によるパネルセッションが行われた。岡部教授から事前に提示された3つの質問「ウクライナ難民危機を受け、難民保護への国際協力のあり方に変化があったか」「変わったとしたらどのように変わったのか」「難民支援のための国際協力は本来どうあるべきか（それに向けた課題は何か）」を踏まえ、活発な議論が交わされた。

■その他の企画

10月11日に「経済制裁のインパクト」EUと国連」、17日に「UNDP・UVキャリア・セミナー」、18日には「国際機関・国際協力キャリア・ワークショップ」を実施。いずれも本学公式ウェブサイトに記事を掲載している。

1号館前に新たな広場



われていた、ひな壇状のテラス「S-TERRASSE」が1号館前に新たな広場として誕生した。中央には、初代学長ヘルマン・ホフマン師の胸像が移設されている。9月27日、新デザインとなった正門とともに、完成を記念して祝別式と学生によるイベントが行われた。祝別式は佐久間



「四谷キャンパス環境整備計画」第1期整備の一環として造成工事が行

広場に集う学生が演奏を楽しんだ

ケルン大司教区代表団が来校

4 枢機卿奨学金受給学生らと懇談

9月30日、ドイツ・ケルン大司教区代表団の6人が本学を訪問し、関係者と交流した。

本学とケルン大司教区の関わりは深く、1957年法学部および1962年理工学部設置の際に多くの援助をいただいた。2015年4月に久間勤理事長と睦道佳明学長を表敬訪問。続いて、カトリック大学共同

その後、カトリック・イエズス会センターを訪問。「フリンクス・ヘフナー・マイスナー・ウェルキ4枢機卿奨学金」を受給し、本学で学ぶ留学生と懇談した。同奨学金は、ケルン大司教区が推進しているミヤンマーのカトリック教会援助に協力し、本学が大司教区か



4人の奨学生を中心に記念撮影

に心からの感謝を述べた。

